

DJぶりぶりとは何か？
証言その2

ICC主任学芸員・畠中実さん



Minoru Hatanaka

ムサビ非常勤講師として学生時代からぶりぶり君を知り、ICCの展覧会「インターネットアートこれから」ポスト・インターネットのリアリティにDJぶりぶりと金太郎を起用した主任学芸員の畠中実さんにお話を伺いました。取材・構成：須田千晴（映像：3年）

美大の「穴」に存在する

ぶりぶりは学生時代に僕のムサビの授業も取っていて、その時は金太郎ではなく酒屋の前掛けをしていました。温泉で音楽イベントやっただとかで、以前から彼の存在は地下音楽界隈では轟いていました。といっても一度もイベントを見たことはなかったんですが（笑）。彼はまとも



[[インターネットアート これから]]——ポスト・インターネットのリアリティ展
撮影：木奥恵三 写真提供：NITTCインターネットコミュニケーションセンター [ICC]

僕の授業にいた日は一度もありませんでした。まず間違いなく遅れてきて途中で帰る（笑）。ムサビの映像学科は専門分野の細分化が激しいぶん、一人一人が違う事をやっけていても許容される。その「穴」の中に紛れ込んで「これをやらなきゃいけない」という美大の縛りをかいくぐったとも言えますね。それが確信犯かどうかは知りませんが、やっぱり美大にはオーガナイザー氣質の人が必要で、そういう意味では彼はムサビの中でよく働いていたのだと思います。

今の大学の制度の中では彼は特殊にも見えるけど、ほんとには美大は自由で、目標設定とかとは無縁な生き方もあるはず。そういうぶりぶりの向き合い方には学べべきところがあるんじゃないでしょうか。「こんな人も存在できます」っていうのが、昔は特に美術大学の存在意義だったような気がするんです。

「作家」というより「現象」

ICCの展覧会には「作家」としてではなく、ポスト・インターネット時代の「現

象」として取り上げたつもりです。「金太郎を見たい」って情報がツイッターを介して連鎖反応としてひろがり、「噂」として一躍有名になった。良くも悪くも身の回りのスモールワールドを全世界だと認識してしまふツイッターやFacebookなどのSNSの世界で金太郎として自己を確立した。ちょうど「インターネットアートこれから」という展覧会は、インターネットが極めて日常化した環境下でわたしたちのリアリティがどれだけ変化したのかを探るのがテーマでした。そこで金太郎現象に出会ったわけです。ツイッターの目撃情報で自動的に抽出したり、金太郎が出現した場所のストリートビューに金太郎の画像を貼り付けたりしました。ぶりぶり自身は何も作っていません。今まで通り変わず金太郎として出歩いて、自分に関するエゴサーチだけをしてリツイートしてくれればいいっていう。だから「出品作家」にするか最後まで悩んだし、ぶりぶり自身も「金太郎がいいです」って言っていたんですが、結局「DJぶりぶり」金太郎になりました。出品料も払っています。

「目的なき意志」で人を動かす力

会期中にイベントをお願いしたら寒川晶子さんと川楽喜弘さんを選んでライブ

をやって、彼はニコニコ最前列で客として聴いていて、最後挨拶で「僕の好きな人たちの音楽をみんなに聴いてほしかったから、来てもらいました、ありがとうございました」って締めていた。自分がオーガナイズしたものを彼が自分の「作品」として考えているのかどうか分らないけれど、好きなものを見たいし見せたいっていう欲求に忠実なんだろうと思います。あとバンツ一丁の生写真とかいろいろ物販で持ってきたけど、ほとんど売れなかった（笑）。周りがお膳立して出てきた人じゃないですよ。もちろん僕らが持ち上げる部分もなくはないだろうけど、シャルさんが認め、美術手帖の岩渕さんが起用し、ICCで展示をして、それも全部彼の努力によるものでしょう。無理矢理ではなく何かを巻き込んでしまう力がある。「目的なき意思」というか、金太郎で町を歩くのは実は過酷かもしれないし、あの行動力はすごい。見習うべきところがありますね。

ICCkintaroのタイムライン

